

寺内直子先生

「名古屋の雅楽の歴史と豪商吉田家旧蔵の雅楽器について」

紅村兆乃 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士前期課程（音楽学）

1. はじめに

2021年度音楽学コースの特別講座には、神戸大学国際文化学研究所教授の寺内直子先生をお招きした。2022年3月2日（水）14:00～16:00、愛知県立芸術大学大演奏室Aにて「名古屋の雅楽の歴史と豪商吉田家旧蔵の雅楽器について」という題目でのご講義であった。

寺内直子先生は、日本音楽史および音楽民族学を専門とし、日本の伝統芸能を様々な地域との関連において多角的な視点から研究されている。著書に『雅楽を聴く：響きの庭への誘い』（岩波新書、2011年）、『伶倫楽遊：芝祐靖と雅楽の現代』（アルテスパブリッシング、2017年）などがある。

2. 講座の内容

講演では、名古屋の豪商吉田家旧蔵から発見された史料を主な観点に、尾張地方の雅楽の歴史についてご教授いただいた。

雅楽は、天皇や貴族など上層階級の人々が親しむ宮廷芸能のひとつとして発展してきた。詳細にはその起源により三つのジャンルが存在する。—(1) 神社の祭祀と強い結びつきがあり、奈良・平安時代の言葉による歌謡に舞踊を伴う日本固有のもの (2) アジア大陸から輸入され、器楽のみで奏でられ舞踊を伴う外来のもの (3) 平安中期以降に成立し、貴族が自作して嗜んだ歌謡—以上がまとめて雅楽と呼ばれている。雅楽伝承の担い手は、時代により変化してきた。江戸時代以前には、当時の都・京都およびその周辺の奈良や大阪に楽人の拠点があり、それぞれの家で専門性をもち伝承していた。明治時代に入り都が移ったことで楽人たちもまた東京へ流れ、現在の宮内庁式部職楽部へとつながる役所が設けられる。

このような歴史的背景ゆえに、東京や京都周辺以外の地域の雅楽研究はあまり行われていないのが実情である。本講演で寺内先生がお話くださった尾張

地方においては、熱田神宮、真清田神社、東照宮を中心に雅楽が伝承されてきた。熱田神宮および真清田神社には古い舞楽面が数多く残っており、平安時代以来受け継がれてきた伝統の長さがうかがえる。東照宮においても江戸時代初期より雅楽が行われ、これらの背後には尾張藩の支援が存在していた。幕末から明治維新にかけても浄土真宗大谷派のお寺などで雅楽は盛んに行われたが、明治時代になり幕府体制が崩れ、神社組織にも混乱が起きたことで、その勢いは一時衰えを見せる。

衰退期を経たのちの名古屋では愛好家を中心に雅楽が復興されていった。吉田家旧蔵に保管された史料は、当時の伝承の実態を伝える貴重なものである。名古屋城下で油商を営んでいた高麗屋（吉田家）は、第二次大戦の戦火からも逃れ、美術品や文書、写真、芸能にまつわる史料を保管してきた。本学に寄贈いただいた龍笛など楽器も所蔵品に含まれている。史料の中には、宮内省の楽人から高麗屋七代目・吉田種彦へ与えられた伝授書があり、種彦はおよそ二十年の歳月をかけて種々のレパートリーを習得したようである。現在の演奏会プログラムにあたる楽曲目録からは、高麗屋はじめ当時の名古屋の財界人が楽会を開き、自作の歌謡を演奏するなど新しい試みを行っていたこともうかがえる。こうした愛好家の人々の嗜みは、私的活動にとどまらず、熱田神宮や東照宮における雅楽復興へとつながり、明治初頭に衰退した名古屋の雅楽伝承の再興が導かれたのである。

3. おわりに

豪商吉田家の保管史料は、本学所在の愛知県近辺における雅楽の歴史を示してくれるものであった。都のみならず、地方でも独自に雅楽伝承の場が育まれていた事実、さらにはその伝統の中で素人愛好家が担った役割の重要性を認識する貴重な機会となった。